

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：31307

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K02678

研究課題名(和文) 大正・昭和期の女性音楽教育者に関する研究 増子としと小林つや江に着目して

研究課題名(英文) Research on Female Music Educators in the Taisho and Showa Eras: A Focus on Toshi Masuko and Tsuyae Kobayashi

研究代表者

松本 晴子 (Matsumoto, Haruko)

宮城学院女子大学・教育学部・教授

研究者番号：50453353

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は大正・昭和期の女性音楽教育者から《思い出のアルバム》の作詞者増子としと《まつぼっくり》の作曲者小林つや江に着目し、2人の人物像と業績について整理し体系的にまとめたものである。増子としは幼児教育において子どもの発達に応じたことばを大切に扱い、現在も愛唱されている歌を数多く作詞していること、小林つや江は児童の興味と関心を第一に教材と指導法を工夫し実践に即した論考を多数記述していることが確認された。

2人は激動の大正・昭和期において、確固たる理念を持って音楽指導に向き合っていたことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

《思い出のアルバム》の作詞者増子としと《まつぼっくり》の作曲者小林つや江については、これまで丁寧に研究されてこなかった。本研究を通して、2人の人物像と業績を体系的に整理したことは、今後の研究に詳細な資料を提示することとなり意義がある。

激動の大正・昭和期の女性音楽教育者の2人が子どもを主体とした教材と指導を理念として奮闘したことは、現在の教育者に勇気と希望を与え、音楽活動のなかで何を大切にすることが大切なのかを問うものである。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on two notable figures from the Taisho and Showa periods: the lyricist Masako Masuko, known for "Memories Album," and the composer Tsuyae Kobayashi, known for "Matsubokkuri." It systematically organizes and summarizes their personas and achievements. Masuko prioritized utilizing language appropriate for children's developmental stages in early childhood education, and continues to create numerous beloved songs. Kobayashi, on the other hand, emphasized tailoring teaching materials and methods to children's interests and concerns, evidenced by a plethora of practical essays. Both individuals demonstrated a steadfast commitment to music education amidst the turbulent Taisho and Showa eras.

研究分野：音楽科教育

キーワード：子どもの発達に応じた教材 子どもの興味・関心 主体的な音楽活動 子どもへの愛情 同業者との連携

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

現在の音楽教育学の研究は、音楽の本質を捉えようとする理念に目を向けた研究よりも、教材開発などの具体的な指導に直接結びつく実践的な研究と調査研究が好まれる傾向にある。これは当然のことであるが、広域科学の観点から音楽の役割、機能、作用など音楽の本質を考え問い直す過程を経てこそ、音楽教育の立場がより明確になり、教育効果をもたらす教材と指導法を導くことに繋がるのではないだろうか。多彩な音楽に溢れ、価値観の多様化してきている今だからこそ、音楽教育の本質について再考することを大切に扱い、歴史に立ち返り先人たちの業績から学ぶ姿勢を持ち続けていきたいと考える。そして、そこから得た知見を現在、未来に継承しながら、新しい知見を積み重ねていく作業につなげていきたい。

このような学術的「問い」から、本研究の背景として、次の2つをあげる。

第一に、先人の足あとをたどることから音楽教育観、指導観について示唆を得る。これまでもある個人に着目しその歩みから音楽教育観を探ろうとする研究は、数多く報告されてきているが、本研究では大正・昭和期の女性音楽教育者増子とし(以下とし)と小林つや江(以下つや江)の2人の女性音楽教育者に着目する。

とし(1908～1997)については《思いでのアルバム》の作詞者であり幼児教育に尽力したということ以外、詳細には研究されておらずその業績は明らかとなっていない。としは、筆者の勤務校である宮城学院女子大学の前身宮城女学校の卒業生であることから、としが幼児教育者として歩むことになったいきさつとどのような人生を歩んだのかを明らかにしたいと考えた。としは、実践家であり実践に基づいた教育観から、子どもたちの表現意欲を音楽によって引き出そうと考え、作詞、作曲と指導法などについての執筆を行ったり、保育者に向けて、音楽教材とその指導法を音楽カリキュラムのテキストとしてまとめたりしている。このことからとしの著述などを精査し、その音楽観、指導観、教育観を検討することによって、幼児教育に関わる者には何が大切なのかの示唆を得たい。としの人生の歩みと幼児教育に関する研究の概要を整理・分析し研究を進めることとする。

つや江(1901～1987)は《まつぼっくり》の作曲者であり、長らく東京教育大学附属小学校に勤務したことは周知されている。附属小に勤務していた時の指導にかかわる論考は『教育研究』に数多く報告されているものの詳細については整理されていないこと、他の作曲作品、著作などについては明らかにされているとは認めがたいことから、つや江の歩みと音楽教育観ならびに指導観などについて資料の収集、分析をとおして丁寧に研究を進めていく。

第二に、としとつや江の研究をふまえて小学校、幼稚園や保育所(園)などにおける音楽の役割について、広域科学の観点から考察することである。集団生活のなかでの音楽、集団でありながら個として向き合う音楽に、教育者はどう向き合い、どう対応するのか、発達に応じた教材とその指導法について検討することである。現在は次々と新しい歌が生まれ、歌唱音楽教材が溢れている。これは好ましいことであるが、子どもの発達に応じた心情に合った歌詞、歌いやすい音域、乗りやすいリズムかどうか、時代に流されない子どもの発達に応じた教材かどうか、どのような表現力を目指すのかなどについては、吟味されてきていると言いはれ難い。また、幼児教育と小学校教育との連携における音楽教材の扱い方、音楽指導法についての研究もそれほど多くはない。音楽という領域は人間の人生の歩みと共に存在し、発達に応じた音楽教材の選択は重要である。

なぜなら音楽表現の基礎的な技能の発達、例えば呼吸の持続、声域の広がり、感情の発達などは体の成長とともに育まれていくからである。さらに、音楽表現の基盤となる思いや意図を持って表現することは知的、精神的、社会的な成長とも関連している。したがって、人間の発達に合わせてどのような音楽に触れ、体感するかという音楽教材の選択と、その教材をどのように伝えるかという音楽指導の考察は大切である。小学校、幼稚園、保育所(園)などにおいては、音楽活動を通して音や音楽に興味を持ち、親しみを持ち、豊かな感性や情操を深めることが重要である。これによって音楽科は心を育て人間としての成長と人格形成に貢献すると考える。小・中学校における音楽科は技能教科といわれ、現在でも主要五教科の下に位置付けられる傾向がある。しかし、学校教育が人間教育を担っているという立場であるとすれば、特に中学校の音楽科は、大切にされても良い科目といえよう。現在の中学校における音楽の授業は、合唱祭や合唱コンクールに向けては盛り上がり、学校としてもサポートする体制を整えているところが多い。しかし行事が終わると音楽を学ぶ意欲が減退し、息抜きの教科になってしまう生徒が少なからず増えてくる。

このことから、音楽が人生にどのような価値をもたらすのかに焦点を当てる必要がある。音楽が人間の感情や表現力、創造力を豊かにするだけでなく、共感やコミュニケーションの手段としても重要であることに気付かせることが重要である。このようなアプローチによって、生徒は音楽を単なる技能の習得だけでなく、人生を豊かにする一つ的手段として捉えることができるようになる。

音楽教育のカリキュラム研究においては、幼児・児童・生徒が音楽を学ぶことで人間的な成長や豊かさを実感できるようなアプローチを追求することが重要である。それによって幼児・児童・生徒は音楽が単なる息抜きや娯楽に留まらず、人間の心や精神に深い影響を与えるものであることを理解し音楽への関心と継続的な学習意欲を促すことになると考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は次の2点である。

- (1) 増子としと小林つや江の残した作詞、作曲などの作品、また音楽指導にかかわる著述を精査し、音楽教材と音楽指導法、教育観の特長を明らかにする。
- (2) 幼児期から児童期に渡る一般的な心身の発達に対応した音楽教材と音楽指導法を体系的にまとめ、音楽カリキュラムの一つの試案を示す。

3. 研究の方法

本研究を進めるにあたり、次の3つの方法を用いた。

- (1) 増子とし、小林つや江のそれぞれの遺族、関係者にインタビュー調査を行い、資料の提供を受ける。
- (2) 国立国会図書館に保管されている増子としと小林つや江に関わる資料を収集する。
- (3) 宮城学院女子大学図書館、信州大学教育学部図書館はじめ全国の大学図書館に保管されている資料を収集する。

4. 研究成果

(1) 増子としについて

2018年度はとしの経歴の確認と文献の収集を中心に研究を進めた。経歴については、増子家の養女となった遺族の吉野トキ子氏(以下吉野氏)にインタビュー調査を行った。吉野氏からは、としの家庭環境と教育者として活躍していたことを示す具体的な資料の提供を得て、正確な情報を得ることができた。宮城女学校時代については、宮城学院資料室の協力のもと、としが在籍していた時期のカリキュラムと同窓生について明らかにした。

また宮城女学校を卒業してから、神戸の頌栄保姆伝習学校(以下頌栄)で学んだことに注目し考察を行った。これは吉野氏への聞き取り調査によって、頌栄での学びがその後の教育者として歩むことになる基盤となっていることが確認されたからである。戦争をはさみ女性の幼児教育者の地位が認められることが困難な時代に、女性幼児教育者が一致団結し交渉し、としは35歳にして東京都の幼稚園園長となって活躍したことを確認した。

2019年度は、2018年度に収集しきれなかった資料収集を中心取り組んだ。特にとしの業績を中心に整理、検討を行った。《思いでのアルバム》についてはこれまで新聞や論考などでいくつか取り上げられているが、その他のとしの業績について語られることはほとんどなかったことから、本研究において、としの業績をまとめたことによって、幼児教育における音楽活動の意義を示すことができた。また今後としの研究を掘り下げるにあたって、ひとつの指針となるものを示すことができた。

(2) 小林つや江について

つや江が音楽指導にあたって、リズムに着目した実践を行っていたことについての先行研究はいくつか報告されていることをふまえて、2020年度は明らかにされていない次の2つについて検討した。第一につや江が附属小に勤務することになるまでの過程について松本女子師範学校本科第一部から東京音楽学校で学んだカリキュラムからその学びを探った。第二につや江が作曲した《まつぼっくり》以外の「子どもが書いた詩に曲をつけた作品」を整理し、統計的に検討を行いつや江の作品には4分の2拍子、八長調、4分音符=96という黄金比の存在を導き出すことができた。つや江にとって作曲することは、子どもが日常の生活の中で感じたり気付いたりしたことを等身大のことばで表したもの、あるいは子どもが何気なく発したことばをつや江自身が詩という形に整えそれにメロディーをつけて、歌として完成させることだったことを示した。

2021年度は、つや江が附属小の音楽科教員として、どのような音楽指導観を持って授業を実践していたのかについて明らかにした。手掛かりとしたのは、つや江と同時期に附属小に勤務していた2名の音楽科担当教員と3人で共同刊行した『音楽科の系統的指導』の著書である。つや江が執筆した「第1章音楽科における系統的指導の基盤」と「第3章“表現”の系統的指導の実際第1節“歌唱”」を読み解き考察を行った。その結果、次の3点が明らかとなった。第一につや江は歌唱表現活動において歩くことをリズムの基本として重要視し、楽曲の指導にあたってはかならずリズム学習を取り入れていたことである。第二に児童の興味と関心を引き出し、児童と共に取り組む姿勢を持って指導にあたっていたことである。第三に音楽には継続した学びが大切であり低学年からの音楽指導を重視していたことである。つや江は1958(昭和33)年の学習指導要領歌唱共通教材について、曲の解説と歌い方を詳細に分析し記している。そこには発達に応じて拍子打ち・リズム打ち・リズム唱はもちろんのこと、階名模唱、階名唱、写譜をすることが記載されており、現在の小学校の音楽指導では避けられがちな音楽を形作っている基礎的な力を楽曲の指導を通して丁寧に扱うことの大切さを示唆してい

ることが明らかとなった。

2022年度は、つや江の実践から音楽指導の特徴と理念をさぐるために、附属小に勤務していた時代、附属小発行の『教育研究』に精力的に投稿した論文、実践記録、随筆などをできる限り収集し整理した。その結果、つや江の掲載論考などは118稿あることが明らかとなった。118稿について検討を行ったところ、つや江が音楽指導において特に着目していたのは歌唱指導、リズム指導、読譜指導であったことが示された。その背景について、次の2点をあげた。第一につや江は音楽教育の基本は歌唱であると考えていたことである。これはつや江自身が論考の中で明確に述べていることから確認された。第二につや江自身の学びと音楽教育の時代背景である。つや江が小学校に入学し女学校を卒業するまでの時期が1907(明治40)年2月の小学校令の大改革によって「唱歌科」が必修科目となった時期とかさなっており、1941(昭和16)年までこの「唱歌科」が継続されていた。このような音楽教育の歴史的背景によって音楽教育は唱歌教育という考え方が大勢を占めていたことが影響していると推察した。全体をとおして、児童の主体性、興味関心を基本に据えた教材の準備と指導者自身の技能と指導法のスキルアップの大切さが改めて示された。

課題としては、としとつや江の業績をふまえつつ音楽指導のカリキュラムを提案することまで至らなかったことである。これからの研究者にゆだねたい。

(3) としとつや江の接点・共通点

2人の接点は、共に1949(昭和24)に文部省から保育要領改訂委員(以下委員)に任命されたことである。つや江はこの会議の資料を保管しており、その表紙に記載された委員メンバーの名前のうち、自分を含む数人の名前(としが含まれている)に下線やチェックを入れていることが確認された。としとつや江は面識を得ていたことが明らかとなった。

共通点は、3点あげたい。第一に子どもの発達に応じた言葉や詩を大切にし、子どもの気持ちや心を反映した詩や歌を作ることに関心を持っていたことである。

第二に精神的支柱と心の拠り所として、それぞれ宗教を大切にしていたことである。それは行動や教育活動に影響を与えていたと思われる。

第三に単独での執筆や活動を行いつつ、共同で作品を創りあげていることである。共同作業の背景には、お互いの専門性や経験を生かし合いながら、より充実した作品を創り出すという信念やポリシーがあり、お互いの専門分野を尊重し、共同作業を通じて相乗効果を生み出すことに注力していたと考える。

(4) 本研究の総括

本研究を総括すると、としとつや江の人物像と業績の考察を通して大正・昭和期の女性音楽教育者が、音楽は子どもの健やかな成長にとって重要な役割を担う存在であること認識し、情熱を持って音楽指導に取り組んでいたことが明らかとなった。具体的には次の2点をあげることができる。

第一に、としは幼児教育の分野で、新しい教材や指導法を開発し、子どもの感性や創造性を引き出すことに注力した。つや江は小学校教育の分野で、子どもの発達段階を考慮した音楽の基礎的な力を育むための指導法の工夫に尽力した。

第二に、としとつや江の活動は保護者や同僚にも大きな影響を与えた。としとつや江が執筆している雑誌などを手にした保護者は、家庭で子どもと音楽を通じた関わり方を学ぶきっかけを得ることができた。また、同僚たちも2人の指導方法やアイデアに触発され、自身の音楽指導に取り入れることができた。としとつや江は音楽を心から愛し、音楽指導に情熱を注いだ教育者であった。その音楽指導の根幹には音楽が生活と共にあり、季節や日々の出来事と結びついているという一貫性した理念があった。教材や音楽指導の構築においても緻密さと丁寧さを大切に、その信念は揺らぐことがなかったことが明らかとなった。

以上から本研究は、現在音楽指導に携わっている保育者と教育者、また今後、保育や教育の分野で活躍しようとする人々に、音楽指導にあたって重要なことは何であるかを問い直す羅針盤となるものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 松本 晴子	4. 巻 23
2. 論文標題 小林つや江の音楽指導の特徴：『教育研究』掲載論考の分析から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 宮城学院女子大学発達科学研究	6. 最初と最後の頁 7～20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20641/00000672	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 松本晴子	4. 巻 22
2. 論文標題 小林つや江の音楽指導観－『音楽科の系統的指導』に着目して－	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 宮城学院女子大学発達科学研究	6. 最初と最後の頁 57-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20641/00000628	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 松本晴子・伊藤哲章・守渉・井坂恵	4. 巻 22
2. 論文標題 保育者に求められる音楽技能についての一考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 宮城学院女子大学発達科学研究	6. 最初と最後の頁 123～132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20641/00000634	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 松本晴子	4. 巻 21
2. 論文標題 小林つや江、作曲活動の根底にあるもの	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 宮城学院女子大学発達科学研究	6. 最初と最後の頁 39-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20641/00000573	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松本晴子	4. 巻 54
2. 論文標題 疾病と民俗音楽－原点にみる近似－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本民俗音楽学会会報	6. 最初と最後の頁 14-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松本晴子	4. 巻 25号
2. 論文標題 増子としの人と業績	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宮城学院資料室年報	6. 最初と最後の頁 15-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松本晴子	4. 巻 15
2. 論文標題 地域の民俗芸能と学校の支援	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 音楽学習研究	6. 最初と最後の頁 73-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松本晴子	4. 巻 19
2. 論文標題 教育者増子としの人格形成過程	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宮城学院女子大学発達科学研究	6. 最初と最後の頁 17-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20641/00000461	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松本晴子	4. 巻 24
2. 論文標題 2020年度発達科学研究所オンライン講演会：人間と音楽、保育・教育における音楽	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 宮城学院女子大学発達科学研究	6. 最初と最後の頁 125-143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2641/00000113	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 天童睦子、松本晴子	4. 巻 51
2. 論文標題 女性・子どもの文化論序説：ジェンダーと地域芸能の視点から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 キリスト教文化研究所研究年報	6. 最初と最後の頁 82-89, 92-93.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20641/00000389	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 松本晴子・伊藤哲章・井坂恵・守渉	4. 発行年 2022年
2. 出版社 宮城学院女子大学発達科学研究所	5. 総ページ数 41
3. 書名 保育者の音楽表現活動を支えるもの 音楽技能科目に関するカリキュラムの開発を目指してー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------